

「環境雑感」

農林水産省畜産局畜産経営課 課長 永村武美



本誌への寄稿を依頼されたのが7月中旬のことである。当課に赴任したのが丁度一年前の7月である。以来、仕事の相当部分をふん尿処理対策に向けてきたのだから、書くネタは山程あると思っていたが、なかなか筆が進まないうちに締切日が迫ってきた。

仕方がないので、研究社の英和大辞典を開き、「environment」の項を引いてみた。enは「～の中に入れる」「～にする」の接頭辞。vironは「環、丸いもの」の意。そしてmentは動詞を名詞化する接尾辞である。要すれば、「環境」なる言葉は英語(あるいはその語源たる仏、独語)の日本語訳であるわけだ。

辞典には「周囲」「外界」「四囲の情況」「環境」「包囲」「取巻き」等の訳語がある。上記の『「環」の「中に入れる」こと』を直訳すれば、自分を中心とした環の中に入るものが即ちenvironmentであると考えるのが自然と思う。裏を返せば、環の外部はenvironmentとして意識されるものではなかったということだ。

しかるに訳語の中に「周囲」「外界」等、環の外を意味するものが多いのは奇異な感を受ける。

そもそも、特定の集団(部族、あるいは村落、古代都市等)を作り上げる、ないしはその結束を固めるため内部のいざこざを解消する際、解決すべき事象全体を「環境」として意識したことからの言葉が生まれたのではなかろうか。要すれば、身内同志が安心して暮らし、生存していくための条件、例えば人口に見合う食料確保の水準、伝染病の蔓延を防止するための清浄な飲用水の確保や排泄物の処理可能量といったものが原始的集団の統合要件であったに相違ない。

しかし、いかなる集団も人口の増加に伴い膨張していくのは必然である。身内が生活する環の拡張が必要となるわけだ。

その場合、環の外の状況を的確に把握することが不可欠となる。侵略の対象となる地域へのアクセスの条件、土壌の肥沃の度合、水源の存在、気候、他の集団の脅威等がそれである。これらの要素を正確に把握できない場合、その集団の拡張は成功せず、集団の調和が損なわれ、崩壊の途を辿らざるを得ない。従って、環の外の諸要素も集団の存続のために極めて重要な「環境」として認識されるに至ったのではあるまいか。

かなり次元の低い解釈論を披露して読者諸兄の嘲笑が聞こえてくるような気がするが、それはさておき我が畜産の環境問題である。

戦後の食糧増産の過程で「有畜農家創設特別措置法」なるものが昭和20年代末に制定され、所謂ふん畜として家畜の導入が奨励された。50年後の現在ふん尿処理対策で四苦八苦しているのがまるで嘘の様な話である。50年前は、畜産の量的拡大を国家的見地から慫慂される環境であったものが、今や畜舎の移転先で反対運動が展開される環境へと様変わりしてしまった。

昭和40年代の選択的拡大の一環として急速な拡大を続けてきた我が国畜産がその過程で見失ってきた外部環境要因とは何であったのか、遅ればせながらしっかり把握すべき時である。

質的に差はあるが、同じ拡大期に水俣、四日市、川崎等に代表される鉱工業に由来する各種の大気、水の汚染が国民の指弾を浴びた様な結末だけは何としても回避する必要がある。

そのためには、ふん尿の土地還元(裏を返せば還元用農地の確保)を原則に捉え、生産の現場が生活の場としても許容可能な空間に近いものにしていかなければ、畜産集団の外の生活者に理解されるはずはない。

その意味で、ふん尿の適正処理の必要性に対する生産者の認識の高まり、耕種部門との連携拡大への取組み、周辺地域や近隣都市住民とのふれあい活動の展開等、内なる環境と外なる環境との調和を図ろうとする試みを育てていくことが焦眉の課題となっている。

それにしても、牛の暖気中のメタンまでもが、オゾン層破壊の一原因と認識されてきたとは、何とも畜産の外的環境はグローバルになったものである。